[redacted]

短篇小説

電報

永代美知代

（下）

『電報！電報！留守ですか』

玄關で頻りと怒鳴る聲がする、不安な思ひが、彌生の胸に稻妻と閃めいた。

『ソレ早く！』

お祖母樣にせきつかれて受取つた電報を、彌生は慄く手に怖々押し開いた。

コンヤカヘル

『まあやつぱり！』

呆然としたやうな氣持ちになつて彌生は其處に立ちつくした。

――三年前父樣が突然腦溢血でおなくなりなすつて、それから兄樣が高商を御卒業になる其日を、家中皆なで、待つて〳〵、お祖母樣も、母樣も、姉樣も、それをどんなに樂しみにした事か、兄樣はいつも優等の成績で、特待生でゐらつしつた、お背の高い、肉付きのよい、立派な御體格で、些少も御病氣なぞありさうには見えなかつた。

それだのに急に血をお吐きなすつたと云ふ御通知、あの時のかなしさ、怖ろしさ！

おゝ、しかしまさか御死去なさらうなどとは思はなかつた。

もう御卒業も間近に迫つて、丁度今年は父樣の三年忌でもあり、母樣は親戚中へ案内狀を廻して、兄樣の盛んな卒業祝ひをなさるおつもりであつた。わざ〳〵湯殿を新築したり、邸まはりの塀を修繕つたりいろんな雜作をなすつてゐた。

ミチノリカクケツスグコイ

保證人のお名前で打たれた電報を見た時、母樣のお顏色は變つたけれど、

『ナニ、血を吐いたと云つても、肺病とばかりは限りません、胃が惡くて血を吐く者も澤山ある』

今から考へれば、それは年老つたお祖母樣だの、私達に心配させまいため、わざとあんなに元氣のよい事を仰有つたのかも知れない

母樣は其夜すぐ夜汽車で神戸へお立ちなすつた――

『それから、それから――』

彌生は堪らぬ心の痛みを覺えたキトク――

その電文は見なかつたけれ共、それに引次いで打たれた電報として、

コンヤタツ

は如何にしても悲しい。キトクの病人を汽車に乘せて歸れやう譯がない、あゝ兄樣はとう〳〵おなくなりなすつた！

と新らしい悲しみが胸をついて熱い涙が双頰をひたす。

『彌坊や〳〵』

おろ〳〵したやうな聲で呼ぶ聲がら、ことり〳〵音を立てゝ、お祖母樣が次ぎの間まで遣つていらつしつた。

『アレまあ！』

『彌坊、電報は？』

咄嗟の間に彌生は電報を袂に押しかくした。そして急いで傍へすり寄つて、危つかしいお祖母樣のお體を支へました。

『電報は何とぢや、凶か吉か？』

『いゝえお祖母樣、何も來はしませんのよ、先刻のあれね、聞き違ひなの』

まじ〳〵と彌生は嘘をついて、お祖母樣をだましにかゝる。だつて、コンヤツクの電報を見せたらお祖母樣は、それこそチツキリ兄樣の死を覺つてしまつて、どんな大騒ぎが持ち上るかしれはしない御病氣なお祖母樣のお體が心配です。

『確かに電報と云つたやうに思ふがのう』

『えゝ、お祖母樣氣のせいよ、だつて玄關へ出て見ると誰も居ないんですもの』

『矢張り氣のせいかねえ』

力なく仰有つて空を仰ぎながら吐息をお吐きなさる。

『おゝ段々夕暮になる！』

斯う思ふと彌生は堪らなく物悲しい、併しながら泣くにもなかれず、遣瀬ない胸を抱いて、さり氣なくお祖母樣をいたはつた。

『お祖母樣、奥へまゐりませうよ』（をはり）